

入道崎灯台で 「石焼料理」を 食べてみた

取材・文

大内さおり(一般社団法人日本海洋文化総合研究所)

協力

田中 勝・小林範仁(入道崎灯台利活用事業実行委員会)
丸山岳人(男鹿半島・大湯ジオパークガイドの会)

秋田県・男鹿半島の最北端。海に突き出す岬の先に入道崎灯台はそびえる。灯台の足元には、郷土料理の「石焼料理」に使われる特別な石がある。灯台を眺めながら石焼料理を実食すると、大地の長い歴史や人々の営みが、灯台という存在の奥行きとなって、浮かびあがってきた。

黒白しま模様灯台のわけ

全国には、一般公開されている「のぼれる灯台」が16基ある。そのうちの1基が、秋田県男鹿市、男鹿半島の先端にある入道崎灯台だ。文字どおり、内部に入り登ることができる。「のぼれる灯台」の中では唯一、黒白のしま模様の灯台である。

航海の目印になる岬の先端や、高い陸地に立つ灯台は「沿岸灯台」と呼ばれる。灯台の色は原則として「白」と定められている。しかし、周りの風景に溶け込んで見えにくい場合は、赤と白または黒と白のしま模様に塗られることもある。雪が多い北海道や東北地方にしま模様の灯台が多いのは、このためである。

入道崎灯台の初点灯は、明治31(1898)年。当時、周辺には木造の船川灯台(秋田県)と酒田灯台(山形県)の2基しかなかった。そのため、青森県の日本海側から山形県までの海岸は、「暗く危険な海域」と呼ばれていた。

入道崎灯台は、その暗く危険な航路を照らすために建てられた。「白色塗六角形鉄造」の西洋的な灯台である。当時の日本では最大の第1等フレネルレンズが使用された。

フレネルレンズは、厚い凸レンズを階段状に薄

く分けて作られる。光を平行に集め、海の曲面上でも遠くまで光を届ける。19世紀のフランスで、物理学者であり土木技術者でもあったオーギュスタン・ジャン・フレネルによって発明された。その功績は、「灯台の革命」とたたえられている。

入道崎灯台は太平洋戦争の戦禍を乗り越え、昭和26(1951)年に改築された。この時、現在のようなコンクリート造の黒白しま模様の姿となった。灯台の隣には資料展示室が併設され、灯台にまつわるさまざまな「なぜ?」を学べるようになっている。

入道崎灯台から大地を見下ろす最古の地層

入道崎灯台の115段の階段の先にある外回廊に出ると、芝生に覆われたなだらかな海岸段丘を一望できる。かつて波の侵食を受ける海岸沿いだった場所が隆起し、階段状の段丘がつけられた。

入道崎周辺では、男鹿半島で最も古い地層が観察できる。およそ9000万~7000万年前の地層で、多種多様な恐竜たちが生きていた時代のものだ。まだ日本海はなく、日本列島はアジア大陸の東の端に接していた。当時の活発な火山活動で噴き出した火山噴出物が積み重なってできた地層



	3
1	4
2	5

1/ 黒白の模様は「のぼれる灯台」16基の中でただ一つ。 2/ 緑色の絨毯が一面に広がる入道崎の海岸段丘。 3/ 鹿落としと呼ばれる断崖。 4/ 男鹿の漁師料理「石焼料理」の実演。熱々の石を木桶に投入。 5/ 石焼料理に使われる溶結凝灰岩は灯台の下の海岸に散在している。

が、この地域に分布している。

入道崎灯台の先には、「鹿落とし」と呼ばれる断崖がある。増えすぎた鹿をこの崖から海へ追いつ落としたことに由来する。

この崖は、とくに火山から噴出した火砕流が周囲の石を巻き込み、冷えて固まった「溶結凝灰岩」で形成されている。この岩石は、男鹿の郷土料理、「石焼料理」に欠かせない特別な石だ。

男鹿の漁師料理、「石焼料理」を食す

石焼料理には、丸い形の溶結凝灰岩が使われる。ピンク、黒、緑の角張った礫がみられるのが特徴だ。「鹿落とし」の断崖から崩れ落ちた岩石は、波にもまれてすべすべの丸石になった。地元では「金石」と呼ばれ、入道崎灯台の先の海岸で探すことができる。

石焼料理は、男鹿の漁師たちが生み出した豪快な料理だ。魚と水を木桶に入れ、火鉢で真っ赤に焼いた石を放り込む。石の熱で汁を煮立たせ、味噌を溶かして味わう。海の香りと熱気が漂う、漁師たちの知恵の味である。

溶結凝灰岩は、熱したまま急激に水で冷やしても割れず、まさに「何度でも使える石」といえる。

筆者が訪れた日は、「入道崎灯台まつり」と「石焼フェス」が開かれていた。昼ごろには、石焼料理の実演を見ようと多くの来場者がテントに集まった。

まず、漬物石ほどの大きさの丸い溶結凝灰岩を火で熱する。大きな木桶の中には、男鹿沖で取れたヒラメと出し汁が入っている。熱せられた石を木桶にどぼんと入れると、だし汁がぐつぐつと煮えたぎり、湯気が勢いよく立ち上がる。その迫力に思わず見入ってしまう。まるで、7000万年前の火山噴火の熱がよみがえったようだ。

ユズ塩仕立てのだし汁に、岩ノリとネギを加えて完成。ヒラメの身はふっくらやわらかく、優しい味わいに思わず笑みがこぼれる。隣にいた地元の小学生の女の子が、母親からヒラメのおかわりを分けてもらっていた。

入道崎灯台へは、JR男鹿駅より「なまはげシャトル」（観光タクシー、要予約）で約60分。車なら秋田自動車道昭和男鹿半島ICから約60分、もしくは秋田自動車道八竜ICから約60分でアクセスできる。

